自主の旗
日教組和歌山
第400号
1999・2・9
編集部発行
☎0734-36-6820

女だって夢を追う！

――宇治田さんが演じてみたいものってなんですか。

僕はドン・キホーテをやりたいですね。「ラ・マンチャの男」というミュージカルが大好きなんです。男の生きざまを描いたすごいミュージカルだと思ってます。男って夢を追っていくものでしょう、女は現実を生きるけれど。

あっ、その「女は現実、男は夢を追う」ということなんですけれど、女も夢を追いたいし、男も現実を生きなければならないのでは。私たち女性部では、今、男はこう、女はこうと決めつけないで、ジェンダー・フリーの発想に転換しようと呼びかけているんです。

ジェンダー・フリーですか。初めて聞きました。いい言葉ですね。

今度、私が教師を辞めて政治の世界に入って行こうと決意したのも、女だから行動しなくちゃ、という思いが大きいですよね。小学校では、出席簿を男女混合にしたり、靴箱の色を男女で分けるのをやめたり、少しずつ男だから女だからという見方を改めて、一人の子どもとしてとらえようとしています。政治の世界にも女性がたくさん参加することによって変わることがずいぶんあるのじゃないかと思っています。

うちの劇団では男も女もとんかちをもつし、男の仕事・女の仕事ってないですね。男と女が混ざっているからこそ一つの集団ができるっていうことがありますね。

赤字公演の清姫もっと予算を！

――南紀熊野体験博で清姫の物語を演じられるそうですが、清姫をどういう女性として描いているのか、ぜひともその辺のお話を聞かせてほしいと思っているのですが。

地元では清姫をとても大事にしているそうですね。それで県からは清姫を悪く描かないでほしいと言われました。今度の公演では清姫をきれいに一途な恋に燃えた女性として描いています。

清姫っていうと、蛇に化してまで男を追いかける女の執念というイメージがありますよね。情の濃い女に捕まったら大変やとか（笑い）。でも、清姫の心情は共感できますよ。執念というより情念の世界として描いてほしいですね。

熊野の土地を舞台に、二人の若者がタイムトリップして安珍と清姫に変化していくという趣向です。熊野の神々の音楽やダンスをテーマに鐘や太鼓がふんだんに使われています。立石和夫さんの脚本なのですが、自然破壊にたいする警告もあってとても深くてすばらしい作品に仕上がっています。

でも、また愚痴になりますがいいですか（笑い）。予算が安すぎるのと、初めての野外ステージなのでどうしたらいいのか見当もつかなくてとても苦労しているんですね。幽玄の世界を演出するって難しいですね。熊野の大自然がバックでしょう。こじんまりしたものでは生きてこないから、花火も揚げたいし、宙づりもしたいし。でも、予算がないからできないんです。衣装も自前だし、劇団からの持ち出しでやっている状態です。だから赤字公演なんですよ。

――大変ですね。野外ステージでの公演というので私たちはとても楽しみにしているのですが、お話を聞いていると頼むときだけは熱心で後は好きにしてくれって感じですよね。宣伝もされていないようだし、行政としてそれでは無責任ですよね。地元の文化を育てるという意識がほしいですね。

話は変わりますが、まり子さんはお正月に春駒を踊られたそうですね。

春駒を舞う人の心を伝えたい！

春駒は被差別部落の人々がお正月の門付け芸として舞ってきたものなのですが、そのことはあまり知られていません。たとえば、「佐渡の春駒」といえば有名で、伝統芸能として親しまれているのですが、被差別部落の人々が踊ってきたという歴史はぷっつりと切れてしまっています。昔は、春駒はお正月の縁起物として親しまれ、人々は春駒が村に来ると家に泊めて歓迎し、踊りを教えてもらったりして家族同然のつきあいをしたそうです。でも、お正月が終わって日常生活に戻ると心を閉ざしてしまうということを聞いたことがあります。春駒という踊りは受け入れるけれども踊っている人は受け入れられないんですね。春駒は踊ってきた人々の思いや歴史と切り離されて広がっていくんです。差別の問題を考えるときにただ単に春駒を広めていくだけではダメなんですね。日本の文化のあり方を見つめてみないと。

民衆の心から離れてしまった文化

――大道芸であったものが、能や歌舞伎や文楽のような伝統芸能になってしまうと全く別物になってしまうでしょう。民衆の間に広まっている春駒でも踊り手を受け入れてこなかったのは、そういう構造と似ているのでしょうか。それが日本の文化だとすれば、なぜ、そうなってしまうのかを問い直す必要がありますね。

たしかに出来上がってしまった文化にはよそよそしい面がありますね。でも、芸能はもともと大衆のものだからその原点を忘れてはならないと思いますね。だれでもどこでも観られるようなものこそ大事にしたいですね。大道芸なんかももっとやればいいんじゃないですか。僕はおしゃれなものは書かないし、いつも大道芸人のスピリッツでやっているつもりです「。キャッツ」とか「オペラ座の怪人」とかは観にはいきますが、自分で演じたいとは決して思わないですね。人情があり、涙があり、人々をとことん感動させるようなものを精一杯つくっていくことが大道芸人に通じると思っています。もっともっと大衆というか民衆のところまで降りていかなければダメですね。そのためにどうしていけばいいかはこれから考えていきたいと思います。まずは、フリー・スペースをつくっていくことかな。

――ミニ・シアターですね。ぜひ、実現してほしいですね。今日はどうもありがとうございました。

お詫びと訂正

前号で、東山照雄市会議員の議員歴を八期（三十二年）とお知らせしましたが、九期（三十六年）の誤りでした。訂正するとともにお詫び申し上げます。